

# パン ジ ャ ラ ポ ー ル

本作は、西インドに実在する「死を待つ動物たちの家」を舞台に、  
荒野に捨てられた動物たちを介護し、看取る男の物語です。  
生き物の命とは何か、孤独の中にあってもただ使命を果たすという  
生き方を描いています。  
ご興味を持たれた出版社の方がおられましたら、ご連絡ください。

いとう良一&中村しげき



インドの西のはての小さな村  
死を待つ動物たちの家  
ある牛は子供を産んで年老い  
主人に連れてこられた  
ある牛は病を持ったがゆえに捨てられ  
またここに拾われてきた  
スタジアムのような広い敷地に  
目のない牛  
肛門に巨大な腫れ物のある牛  
二度と立てない牛  
何の病か涙を流し続ける牛

そんな牛たちが七十五頭  
そして十頭弱の水牛たち  
らくだ やぎ 鳥たち  
荒野で腐り果てるはずだった動物たちが  
ここで生き続けていた  
その一匹一匹が猛烈なハエにたかられているが  
この動物たちは  
すべて生きていた  
ここは干し草がしきつめられただけの牛舎  
彼らはときおり眼を合わせ  
存在を確かめ合う



## I

二十歳の春、ベトナムのサイゴンに降り立ち、西へ、西へ、幾度も国境を越える旅をしていた。そのほとんどが、二等列車か、窓ガラスもないオンボロバスにゆられながらの移動だった。

国境をまたぎ、新しい国に入るたび、全身の血がいかわり、まるで一瞬のうちには別の人間に生まれ変わる気がした。僕は世界地図に線を引けるほどの旅をしている……、この事実には、いつだって心臓がどきどきしていたものだった。

けれど、旅をはじめて半年がすぎると、いつしか、そんな新鮮な感覚はなくなり、もはやいまの状態が、旅なのか、ただの移動かもわからなくなっていた。つまりは、旅を終えるきっかけをみつけれないまま、また今日もバスに乗り

続けるという有様だった。

その日も、西インドのムンバイを越え、アメダバードから、西の地方都市へ向かい、今晚の宿代を浮かすため、さらに行けるところまで行こうとバスに乗りつづけていた。夜になると、昼間の灼熱が嘘のように冷えきった。いままで旅してきた町や村とは、あきらかに気候がちがっている。砂漠地帯に入ろうとしているのだ。

バスの乗客たちはみな慣れたもので、頭まですっぽりと毛布にくるまって眠っていた。僕は予想外の寒さに混乱し、Tシャツを重ね着しつつも、寒さに震えて眠れなかった。

手足をさすってなんとかまぎらわしていたそのとき、眠っていたはずのとなりの男が、自分に巻いていた毛布をひろげ、僕の肩にまわした。冷え切った僕の身体に、だんだん、だんだんと体温がたまっていく。僕は、礼を言うタイミ

ングをつかめないまま、やがて眠りに落ちた。

「ヘイ、ジャパニー、ラストストップ」

バスがとまっていた。僕は運転手に頬をなでられ、目を覚ました。乗客たちはとうにバスを降りている。

終点の停車場には、街灯がない。バスが去っていくと、一面の暗闇になった。宿をさがそうにも、明かりひとつ見つけれられない。どうしようかと頭が真っ白になりかけたとき、はるか向こうに、小さな光が見えた。ゆっくりと近づいていくと、それは、チャイを沸かすコンロの炎だった。太人ひとりがかろうじて入るほどの小屋の中で、男が黙々とチャイを煮立てている。

僕は男の前にしゃがみ、チャイを一杯、注文した。小さなコップでミルクたっぷりの香ばしいチャイをすすりながら、この真っ暗の場所で、こんな真夜中に、



とたずねると、「ノー、ホテル」という答えがかえってきた。僕は、移動の疲れもあり、チャイ屋の横でバックを枕に横になり、ふたたび眠りに落ちた。

なぜチャイを売っているのだろうと疑問に思い、その理由を聞こうとしたそのとき、ふとわかった。特別なことなどない、ここが、バスの終着点だからだ。バスを降りた乗客が一息つき、家へ帰るまでのわずかな時間のために、ここにチャイ屋があり、この真夜中に、鍋を煮立てて客を待っていたのだ。

「夜明けまで、ここにいてよいか」

と男に聞くと、インド人独特の、首をななめにかたむける仕草をして、イエスと言った。明るくなるまでの数時間、チャイ屋の男が発したことは二言、「この西は国境で、砂漠と荒地だ」と「国境は封鎖されている」だけだった。それは、ちょうど僕が聞きたかったことの答えでもあった。もう、僕はこれだけでよく旅を終わりにできると思い、最後にたどりついたのが、この西のはてであったことに、不思議と満足していた。

「この近くに、ホテルはあるか？」

## II

目を開ければ、大きな瞳がいくつも並んでいる。僕は、子どもたちに囲まれていた。村の子たちは、ほとんど裸にちかい格好で、誰一人として靴をはいていなかった。

太陽がのぼり、夜の寒さが嘘のように気温が上昇していた。景色がゆれるほどの猛暑の中、子どもたちは棒切れをもって走り回り、ささいなやりとりで笑い合っている。村を歩き回る牛や犬、ヤギたちを見ていると、人間も動物のひとつであるようにも見える。

ここは、インドに無数にあるだろう貧しい農村のひとつで、宿屋も食堂もないようなところだったが、僕にはこのほうが居心地がよく、今日はこの村でど



うにか寝床を見つけるつもりでいた。

村人たちは、突然現れた外国人にも慣用で、子どもたちと遊んでいても、民家の庭先にいても、誰もとがめることはない。牛糞の匂いと砂塵がこもる村で、みなまんべんなく埃をかぶり、僕を見つけてハローと声をかけてくる。

野菜売りがいくつか並ぶ村で唯一のバザールで、野良牛が小便をたらしていた。そこをとおりかかった老人は、すかさず牛の肛門に手を当て、その手で自分の額をこすり短く祈った。ここでは、牛は聖なる生き物なのである。

僕が初めてオジャスを見たのは、ちょうどそのときだ。それは、半年の旅でも見たことがない、目を離せなくなるほどの異様な光景だった。

三十四、五歳くらいのやせた男が、ただ一步一步、信じられないほどにのろく、目の前を横切っていく。身体中、汗と泥にまみれて、背中に自分の身体よりも大きな牛を背負っている。老いてあばら骨が浮き出た牛だった。生きているの

か死んでいるのか、よくわからない。

男は、そんな牛を背負いながら、もはや歩くというより、かろうじて進んでいる、という具合だった。村人たちは、この男のことを気にとめる気配もなく、まるでそれは、ただの背景のようだった。老いた牛といっても、体重百キロに近い巨体を、やせた男が、その血管の浮き出た腕でかろうじて押さえながら背負い、この猛暑の中、ただひたすら歩いていく。その姿は、十字架を背負ってゴルゴダの丘へ歩むキリストのようにも見え、僕は、ちょっとした好奇心から、男のあとをつけていた。

一時間後、たどりついたのは、これまた異様な建物だった。かつてこの村が城壁都市であった名残りか、刑務所のように一面が壁で囲まれており、その中からは家畜の匂いがただよっていた。



僕は誰の許しも得ることなく、中へ踏みいった。

敷地一体に、動物たちがいる。目のない牛、肛門に巨大な腫れ物のある牛、二度と立てないような牛、涙を流しつづける牛、そして、黒い水牛、らくだ、やぎ、鳥、さまざま動物たちがいたが、その多くは動けないほどの傷を負っているか、目や手足がないか、いまにも死にたえそうなほど老いてやせこけていた。ここは、一種の動物病院であり、「死を待つ動物たちの家」というべき、ホスピスのような施設であることは、僕にも察しがついた。路上で腐りはてるはずの動物たちが、ここで生きつづけていたのである。その一匹一匹が猛烈なハエにたかられているが、みな生きていた。

牛を背負って歩いてきた男が、オーオーと掛け声をあげている。まだ動ける牛は牛舎から出ていった。

そのすぐあと、はじめて男と目があった。彼は、逆三角形の顔を真正面に向け、動きをとめた。僕は、すこしあわてながらも、

「ここで、見学させてほしい」

と、英語で伝えた。

すると男は、小声で「ウェルカム」と言うと、僕をイスに座らせ、チャイをいれてくれた。器を手渡しされた直後には、僕の手元にもハエが猛然とたかりはじめ、一口すすった直後には、チャイの表面に二匹のハエが浮かんでいた。

男は、僕のような外国人が予告もなく入ってきたというのに、何の驚きも見せず、じっと向かい合って座り、この無数のハエの中でチャイをすすりながら、こう言った。

「これは、この家の牛たちのミルクだ」

男の名前は、オジャスという。お互いに歳を聞き合うと、彼はまた牛舎へ戻っ

ていった。

昼過ぎ、メガネの老男がやってきた。僕に握手を求めてくる。

「アイ・アム・アニマルドクター」

老人は、猛烈なハエの中に踏み入り、牛たちを見舞っていく。腰を下ろし、地面に膝をつけ、牛糞を嗅ぎ、一匹ずつ診察する。一日、牛舎の片隅で座って見ていたが、この施設では、数日に一度、獣医がくる他は、オジャスが一人できりもりしているようだった。

ここは、村の西のはずれに位置している。少しだけ周辺を歩いてみたが、朽ち果てた寺院があった他は、砂と雑草だけの荒地が広がっている。

どうしても僕は、ここから離れる気にはならず、動物たちの世話で動き回るオジャス呼びとめ、こう言った。

「突然ですまない。特別なリクエストがある」

この村には宿がない、一週間ここに泊めてくれないか、と手を合わせた。

西のはての小さな村とはいえ、バスは一日に何本かはあるだろう。今夜にも、ホテルのある町へ戻ることもできる。しかし僕は、ここらで今回の旅の記録をまとめる時間がほしかったし、じつはそれ以上に、牛を背負って歩いたこの男のそばで、旅の最後の時を過ごしたいと考えたのだった。

オジャスは言った。

「ノープロブレム。何日いてもいい。ただし、お金はいらない」

オジャスは水くみの手をとめると、僕を寢床に案内してくれた。

布で仕切られたその部屋は、小窓とベッドがあるだけで、電灯すらない。というより、この建物自体に電気がとおっていないなかった。オジャスが言うには、以前は電気があったのだが、使わないのでやめたらしい。

外国人を泊めるのは初めてとのことだったが、彼は滞在に必要なことを、決め事のように次々と伝えてくれた。身体を洗うときは門のそばの水道で、洗濯も同じ。食事については、肉や卵が入っていないが、自分と同じものを朝夕に出してくれるとのこと。

今日運んできた牛は、ドクターの見たてによると、あと数日の息だという。はじめての夜、僕はすぐに寝てしまったが、オジャスはずっと、その牛のそばにいた。

### III

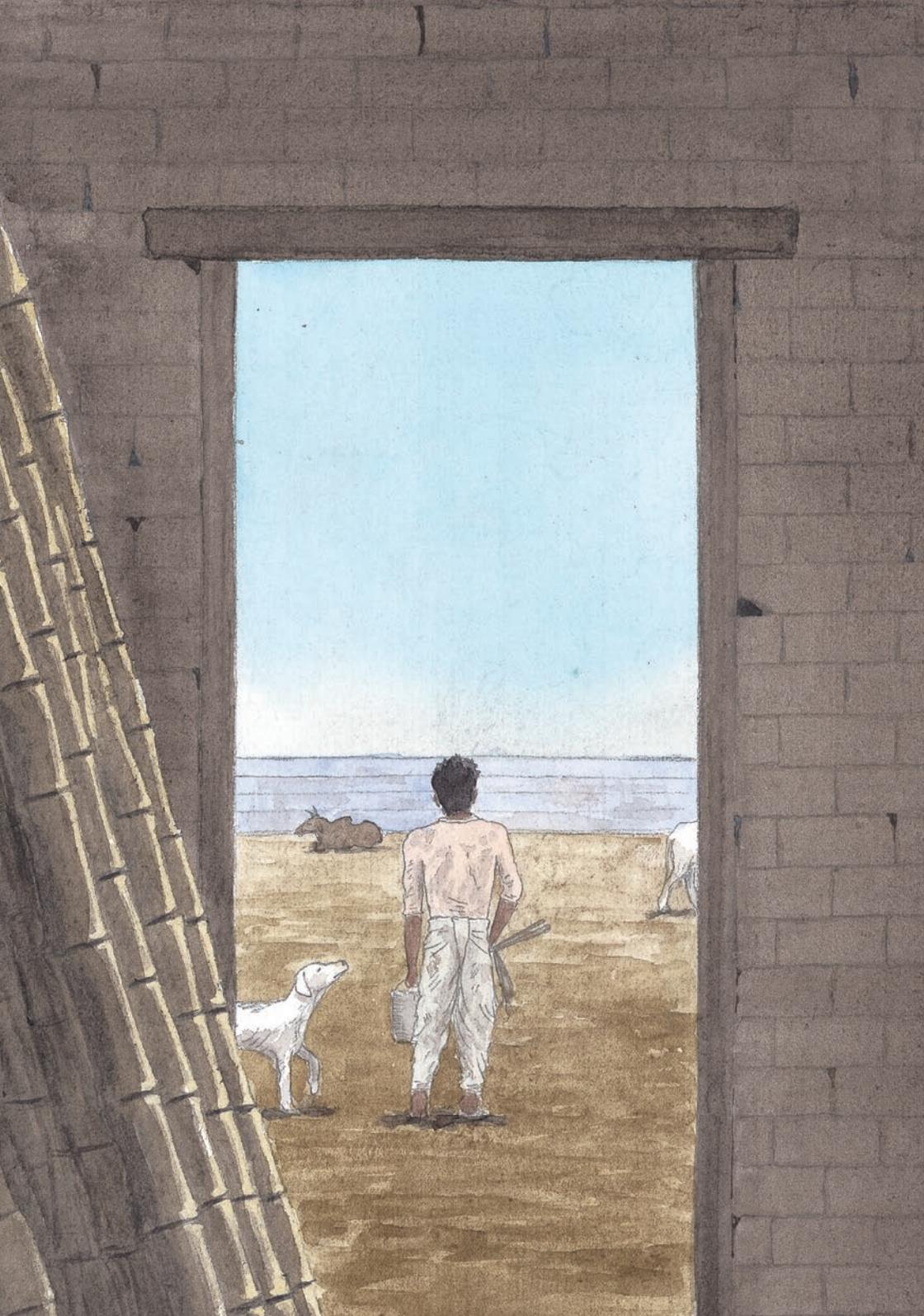
これは旅を終えた後に調べたことだが、僕が踏み入れたこの施設は、現地では「パンジャラポール」と呼ばれており、規模や呼び名は異なるにしろ、インド中に三千以上あるといわれている。

インドで生まれた宗教のひとつに、ジャイナ教がある。殺生を固く禁じる教えを柱としており、したがって、ジャイナ教徒はみな肉も魚も食べないベジタリアンだ。厳格な宗徒は、道ばたの虫を踏みつぶさないように、常にほうきを掃きながら歩いているという。インド中のパンジャラポールは、主にジャイナ教徒の寄付によって運営されていた。

翌朝、僕が目を覚ましたときには、とうにオジャスは仕事を始めていて、牛たちに水をのませたり、片足となった犬の手当てをしていたりした。その犬は、足と腹の傷に包帯をまかれると、血が止まるのも待たず、三本の足ですぐに外へ出ていった。

このように、動物たちの出入りは自由ではあるが、ここにいる唯一の人間である彼は、不自由としかいえない生活を送っていた。少なくとも、僕の目にはそう映る。

一日、彼の仕事ぶりを眺めているだけで、その過酷さがよくわかった。たった一人で百頭近い牛と水牛、十数頭のラクダ、そして犬や、ヤギたちの世話をしているのだから。言葉を交わす相手もなく、強烈な臭いとハエと糞の中で時間が過ぎていく。毎日のご飯は三食とも同じ汁カレー、三時間おきの短い休憩に、自分でいれたチャイをすすめるのみ。誰に見張られているわけでも、見守ら



れているわけでもないのに、彼はこの仕事をもくもくと、日曜も、祝日も、おそらくは自分の誕生日も、朝から晩までこなす。

そしてオジャスは、一日の仕事を終えて手があいたかと思えば、村の周辺を見まわり、傷つき病んだ牛などがいないか調べ、必要があれば背負ってでもここへ運びこみ、しかるべき治療を施すのだ。

僕は、わずかでも彼の負担がへるようにと、滞在中は仕事を手伝おうとしたが、まるで力になれなかった。日常会話は、最小限ではあるが片言の英語と身振りで伝わるものの、いざ動物たちの世話となると、彼なりの順序か、状況に応じた判断があるのか、なかなか入り込む隙間がなかった。それとも客人である僕に、仕事をさせまいとしていたのかもしれない。

夕暮れどき、僕らは煮込んだ野菜カレーを向かいあって食べた。暗くなると

石油ランプをつけ、チャイを飲んだ。

テレビもなければ音楽が流れてくることもない、静かな夜だった。

「どうして、ここで働くようになったのか？」

と僕は聞いた。オジャスは単語を並べるような片言の英語で答えた。

「八歳のころ、私は寺に入るようになった。しかし、寺には受け入れてもらえなかった。だから、ここにあずけられた。この家では三人が働いていたが、いまは私一人になった」

親父は去年死んだ、と続けて言った。その親父とは、実の父親ではなく、この施設の前任者であることは、なんとなく察知がついた。

## IV

何年もこの村で暮らしているような錯覚。いつしか僕の爪の先は真っ黒になり、身体も、シャツも、あちこちから匂う。

朝日で目を覚ますと、散歩をして、軽い朝食をとる。洗濯をして、真水のシャワーを浴び、村を歩き回っていると、いつの間にか日が暮れて、オジャラスと夕食のカレーをかきこみ、ほとんど会話もせず、いつの間にか眠ってしまう。

六日目の午前、僕は村の中心部にでかけて買い物をし、昼過ぎに戻った。オジャラスも外出していたようで、昼ご飯が植物の葉でつつんで置いてあった。

僕は、この一週間の滞在中で、半年の旅の記録をまとめつもりだった。しかし、今では、それがさほど意味のあることではなくなっていた。

そもそも僕が旅にでたのは、見たいものがあるわけでも、憧れの国があるわけでもなかった。目的のない旅は、移動と同じだった。しかし、この移動こそが、僕にとっては旅の唯一の目的だったことだったと気づき始めていた。

小学生のころ、親にしつこくせがんで、分厚い地図帳を買ってもらったことがある。当時の僕には、地図のように世界が広がっていることが信じられずに、いつまでも眺めていられた。やがて、虫メガネを使うようになった。虫メガネで地図を覗くと、そこに住む無数の人や動物、建物までもが見える気がした。子ども時代にしかできない想像遊びだ。地図によって僕は、世界の隅々まで人がいて生活があるという事実を、何度も、何度も、驚いていたのだろう。

半年前、僕が旅に出たのは、通っていた大学を辞め、何もすることがなかったからだ。けれど、それはただのきっかけで、子どものころに眺めた地図上の世界を、本当に地図のとおりなのか、自分の眼で確かめようとしていたの

かもしれない。そして、旅の最後にたどり着いたのは、地図にもものっていないような小さな村の、死を待つ動物たちが集められた施設だったのである。

牛舎や、広い敷地のあちこちから、絶えず音が聞こえてくる。草を食べる音、尻尾でハエを払う音、さまざまな鳴き声。この動物たちには、一匹として名前がなく、おそらくは家族もおらず、多くが動くことすらままならない。しかし、ひとつゆるぎないのは、この動物たちは、皮膚という皮膚が化膿した傷に覆われていても、二度と立てないほどの病にむしばまれていても、いま、生きているということだ。けっして絶えない動物たちの音、そして臭いや糞は、そのあかしだった。生きていること自体が、生きる意味であると、高らかにうたう、あかしだった。

僕は、飽きることなく地図帳を眺めていた子どもを思い出し、今になって新たにひとつの想像をした。虫メガネで地図の隅々を見ていたあのとき、きっ

と当時の僕は、この村と、オジャスと動物たちが暮らす家を見ていたのだと。

夕暮れになった。このところずっと、空に雲がない。おかげで陽が沈む時間になると、空全体が燃え上がるようなオレンジ色に変わり、死を待つ動物たちの家も、壁や地面、草をかじる牛たちすべてが、一色に染まる。

オジャスはまだ帰らなかった。宗教上の理由か、生活のリズムなのか、彼は陽が落ちてからは何も食べない。だから、いつもこの夕暮れのうちに夕食をとることになっていた。いまだに戻らないのは気がかりで、僕は外に出て待った。やがて時間を忘れるほど待った末のこと、地平線をたたえた夕暮れの景色の中から、人影がゆっくり、ゆっくりと、こちらに近づいてくる。オジャスが背中に、子牛を背負って歩いてきた。それは、初めて彼を見たときと同じ、ありえないほどの遅さだった。

オジャスは、家にたどりついて、少しの休息をとることなく、その歩みの

ま、背中の子牛を牛舎まで運んでいった。

今日はどこへ行ったのか、と僕がたずねると、十数キロ離れたとなり村へでかけ、昼には帰るつもりが、道を離れ、荒野を歩いて、迷子の子牛を拾ってきたという。

「どうやって、その子牛をみつけたんだ？」

と、ふたたび僕がたずねると、オジャスは、

「動物たちは、光って見える」

と不思議なことを言い、衰弱したその子牛に水を飲ませていた。いまオジャスが言った「光って見える」とは、どういう意味か、またたずねようとしたが、タイミングを失い、聞けなかった。

夜、僕らは遅めの夕食をとることとなり、オジャスは、いつものカレーを皿



にもりつけながら、「ラストナイト」と小声で言った。僕は、明日の朝に村を発つと、昨日のうちに伝えていた。

「オー、グッド、グッド」

めずらしくオジャスは、食事中にもかかわらず上機嫌で話しかけてきた。

「君が、インド人の料理をつくれるとは思わなかった」

「いつも、オジャスがカレーをつくるのを、見ていたからだ」

僕は、空になったオジャスの皿にすかさずおかわりを盛ると、彼は出会ってから初めてニヤリとして見せた。このときだと思った。僕はずっと聞こうとしていた質問を、この最後の夜に切りだしたのだった。

「オジャスは、今の仕事を、辞めたいと思ったことはないのか？」

意外にも、すぐに答えてくれた。

「何度もある。三度、ここから出ようとした。だが、どうしても、できなかった。

だから、私はある夜、天をあおぎ、神に助けを求めた。私をお救いくださいと。神は姿を現さなかった。しかし、声が聞こえた。おまえの行いはすべて見てきた。おまえが傷つき病んだ動物たちにしたことはみな、私にしたことだからだ」

オジャスは一瞬、だまりこんだかと思うと、ふっと宙を見つめ、ふたたび話を続けた。

「私は神に向かい、こうたずねた。私は何者でしょうか、何を目的に生きればよいのでしょうか。神は答えた。おまえの生きる目的は、おまえが決めればよい。だが、おまえが何者であるか話そう、と。だから私はすぐさま、どうか教えてください、私は何者ですか、と声をあげてたずねた。神は返事をくれた。おまえはこの世の光だと……。翌朝、目を覚ますと、朝日に照らされ、動物たちがみな、光って見えた。その日から、ときおり、ほんとうにときおりだが、この動物たち、ここへくる動物たちが、光に見える」



オジャスはおもむろにたちあがり、外へでていこうとした。

「……来ている」

音などしなかったが、何かに反応したようだ。こんな夜に、昼間ですらほとんどない来客があるとは思えなかったが、僕もあとを追って外にでた。

そこには犬がいた。この犬には、見覚えがある。ちょうど一週間前に治療を施した、あの片足の犬だ。そして、後ろにもう一匹いた。噛まれた跡なのか、横腹に傷口があり、血がたれていた。オジャスは、傷ついた犬を座らせ、傷口を確かめている。

オジャスが言うには、ここで傷の手当てをした動物はしばしば、傷ついた仲間をつれて戻ってくるのだという。

## V

出発の朝がきた。午前のバスで、僕は村を経つ。

今日はすこし早起きし、いままで泊めてもらったお礼として、ひそかに準備していたプレゼントを「死を待つ動物たちの家」まで運んできた。

「これは……、見覚えがある」

と、オジャスは珍しく声を裏返らせて驚いてくれた。

「納屋にあったものだ。もうちゃんと使えるぞ」

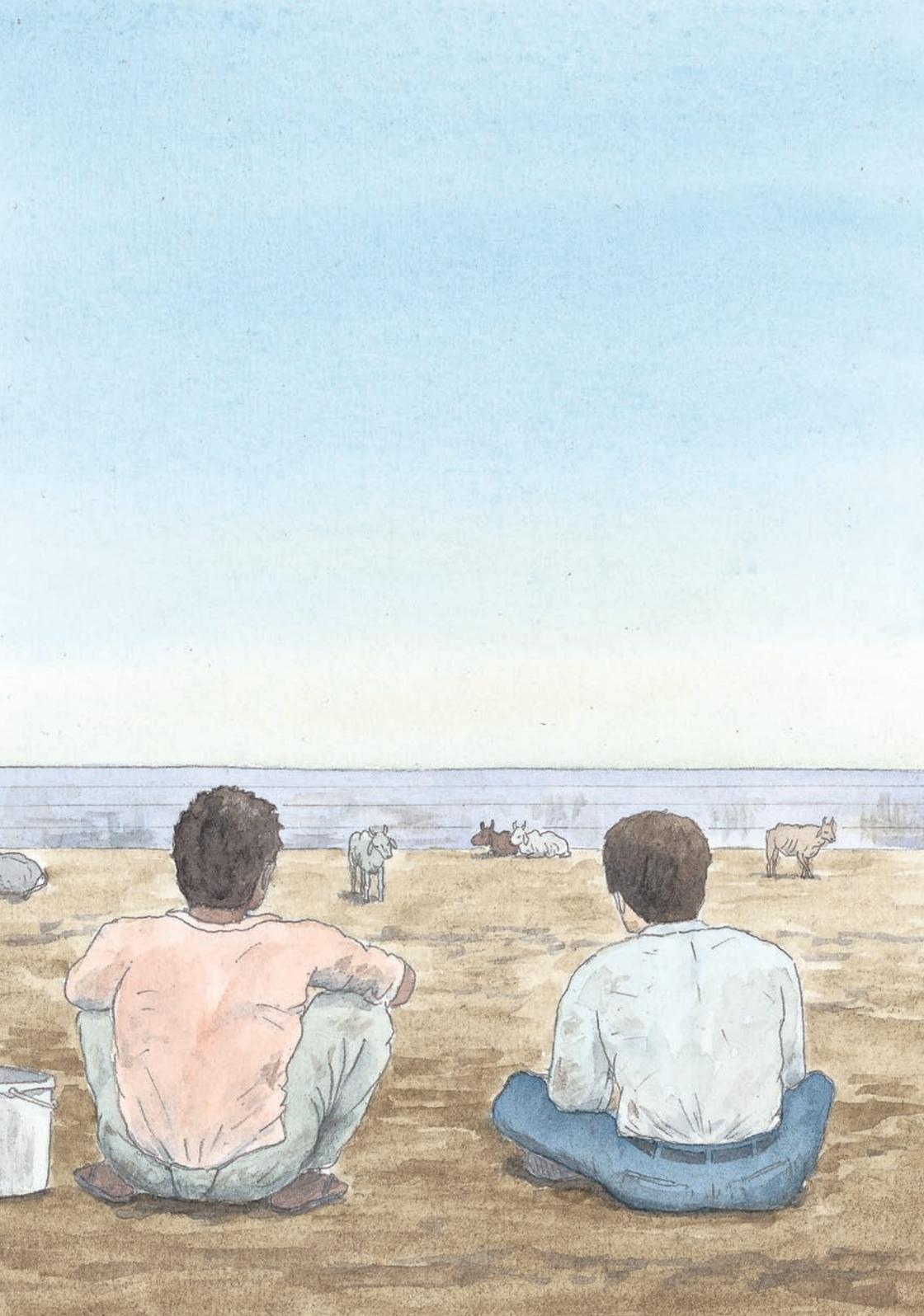
壊れたまま、物置小屋で眠っていたリアカーだ。タイヤが両輪ともパンクしていて、まるで使い物にならなかったが、昨日のうちに村の大工に修理を頼んでいた。

「君へのプレゼントだ。うけとってくれ。直してもらった後、村の大工に、材料代や手間賃を払うといったが、頑として金を受け取らなかった。きっと、何に使うか話したからだ」

「ありがとう。これで私は、干し草や動物たちを、もっとたくさん運べる。礼を言う」

「僕こそ、一週間泊めてくれて、心から礼を言う。僕は、君が牛を背負って歩いてきた姿を、一生忘れない」

その日の朝、オジャスは僕に気がつかってか、仕事をしようとしなかった。最後にチャイをいれてくれて、初めて会ったときのように、無言で僕のとなりで座っていた。



## VI

半年間の旅を終え、僕は慣れない会社勤めを始めていた。朝、電車で出勤し、毎日のように、残業をこなし、アパートへ帰る頃にはいつも深夜になっていた。旅をしていたころとはまるで逆だ。昨日と今日の差などない、ただ単調な日々だった。

けれど、きっと誰にもわからないことだろうが、僕は旅先で偶然出会った、牛を背負い歩く男によって変わっていた。彼には、傷つき、老いた動物たちが、どんな光に見えたのだろうか。いつもそんなことを考えながら、いま与えられた仕事をこなそうと努力した。

もちろん、僕には、光が見えることなんてなかった。それでも、よく思った

ものだった。動物や人がみな光輝いていたら、どんなにすばらしいだろう。きっと、ひとつとして同じ光はなく、息をのむほどに美しいにちがいない。ただそれを見ただけで、一生を生きぬけるほどの光だ。

その日の夜も、残業を終え、アパートへ帰ろうと、駅からの道を歩いていた。その日が、昨日とはちがう一日になったのは、公園通りの帰り道の、外灯もない真っ暗な道路で、野良猫の死体を見つけたからだだった。

車かバイクにひかれたにちがいない。身体がペしゃんこになっていて、口から血を吐いていた。僕は、たとえ仕事帰りで疲れていると、このまま過ぎ去っていくことはできなくなっていた。どうにか葬ってやらねばならない。ただ、公園の中の木の下に埋めようにも、穴を掘る道具などなく、何か方法はないかと夜の公園を歩き回った。けれど結局、何も見つけられないまま一周し、元の

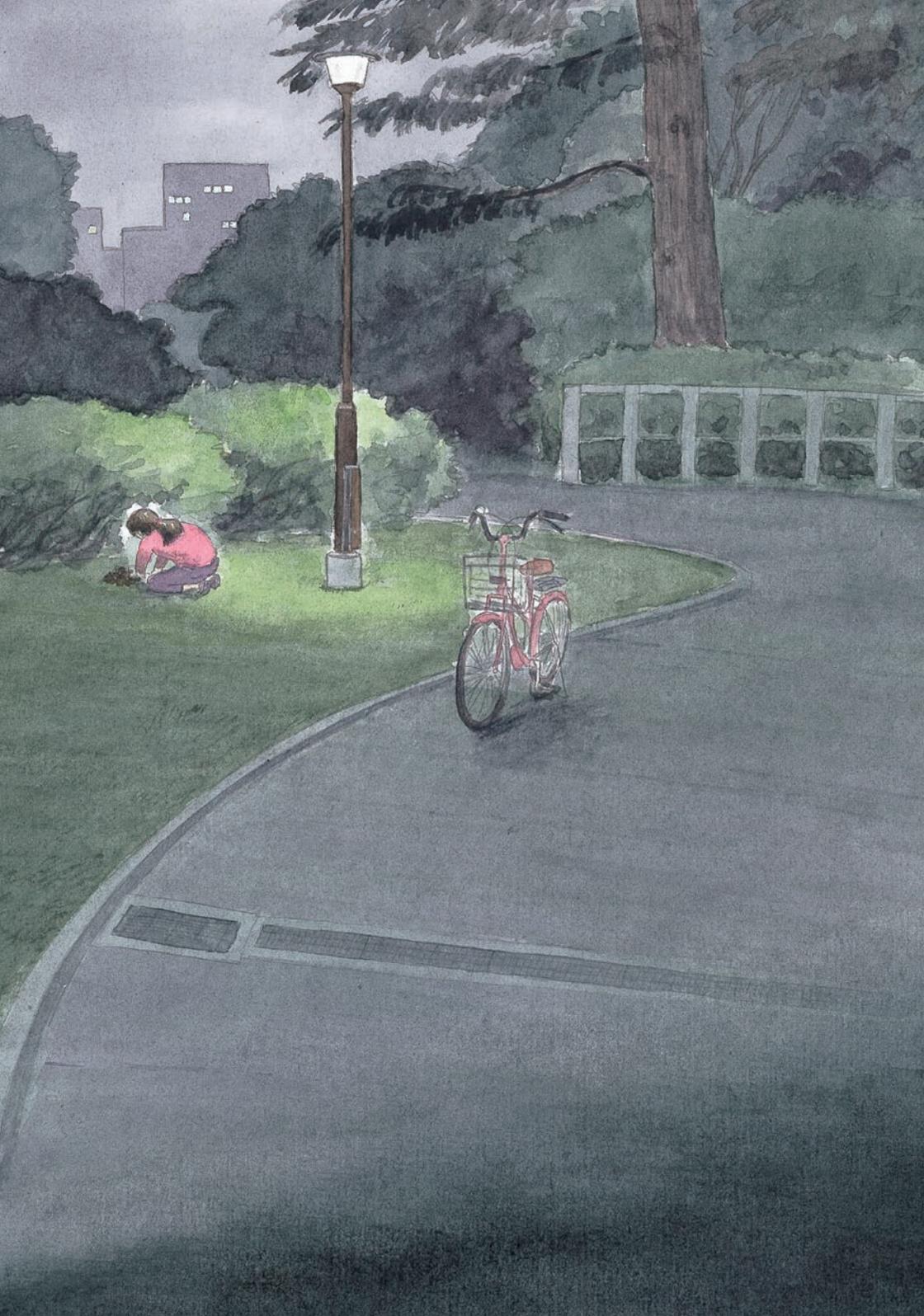
場所に戻ってしまうのだが。

それが、驚くことに、すでに猫の死体がなくなっていた。その代わり、赤い自転車がとまっていた。誰かが運んだようだ。目をこらして見ると、木々が植えられた公園の一角で、女性が素手を地面に突っ込み、穴を掘っていた。僕と同じ歳頃の、小柄で髪の長い人だった。

「あの、僕も、手伝います」

僕は、そっとその女性に近づくと、向かい合って、互いに地面を掘り返した。土は、想像以上に堅かった。女性は、マニキュアが塗ってある、ピアニストのような細い指を泥まみれにして、ほとんど自分一人の力で、猫一匹分の穴を掘りあげた。

彼女は猫の身体を持ち上げ、ほおずりするように抱き寄せると、穴に横たえてのひらを合わせ、目を閉じた。



「……あの、聞いていいかな？」

と僕は、手を合わせる彼女に向かって声をかけた。

「……何？」

「この猫、君が飼っていたの？」

「いいえ、あたしは、たまたま通りがかっただけ」

彼女は立ち上がり、手についた泥をはらいながら、独り言のように、あなたがいないれば気付かなかった、と言った。

「あなたが道でかがみこんでいたのが気になって……。そこに、この猫がいたから」

彼女は、自転車にまたがり、去っていった。僕は、その後ろ姿を見ながら、死んだ野良猫をこの世界になくてはならない猫のように抱きしめた、彼女の一瞬のしぐさを思い起こしていた。

インドはほんとうに不思議な国で、どんな大都市であっても、街中にごく当たり前、牛、猿、ヤギ、犬といった動物たちがいます。中でも牛は、畑をたがやし、毎朝のミルクを提供し、糞は燃料になるといった具合に、生活に密接なパートナーといえる存在ですから、本書に登場する動物保護施設があるのは、ごく自然なことなのでしょう。

ジャイナ教は、仏教とほぼ同時期の約二千五百年前、このインドの地で誕生した宗教です。信徒はおよそ四五〇万人（インド全人口の〇・五％）、徹底した不殺生を貫いており、生物を傷つけないようにと農業には従事せず、主に金融業や宝石などの商取引の仕事に携わっています。誠実で嘘をつかないことで信頼を得て、ビジネスで成功した人が多くを占めています。

ところが、ジャイナ教徒は、「不所有」の戒律から、得た富を必要以上に蓄えることなく、寺院への寄付だけでなく、動物を保護する活動に投じています。本書でとりあげた「パンジャラポール」の運営にいわえ、食肉処理場から家畜を買いとったり、実験に使われた動物たちの機能回復訓練所を設けたりもしています。

このような行為は、インド社会にあっても、極端なものとしてとらえられ

られることがあるのも確かです。しかし、彼らは、どんな小さな生命すらも守ろうとする姿勢を変えることはありません。

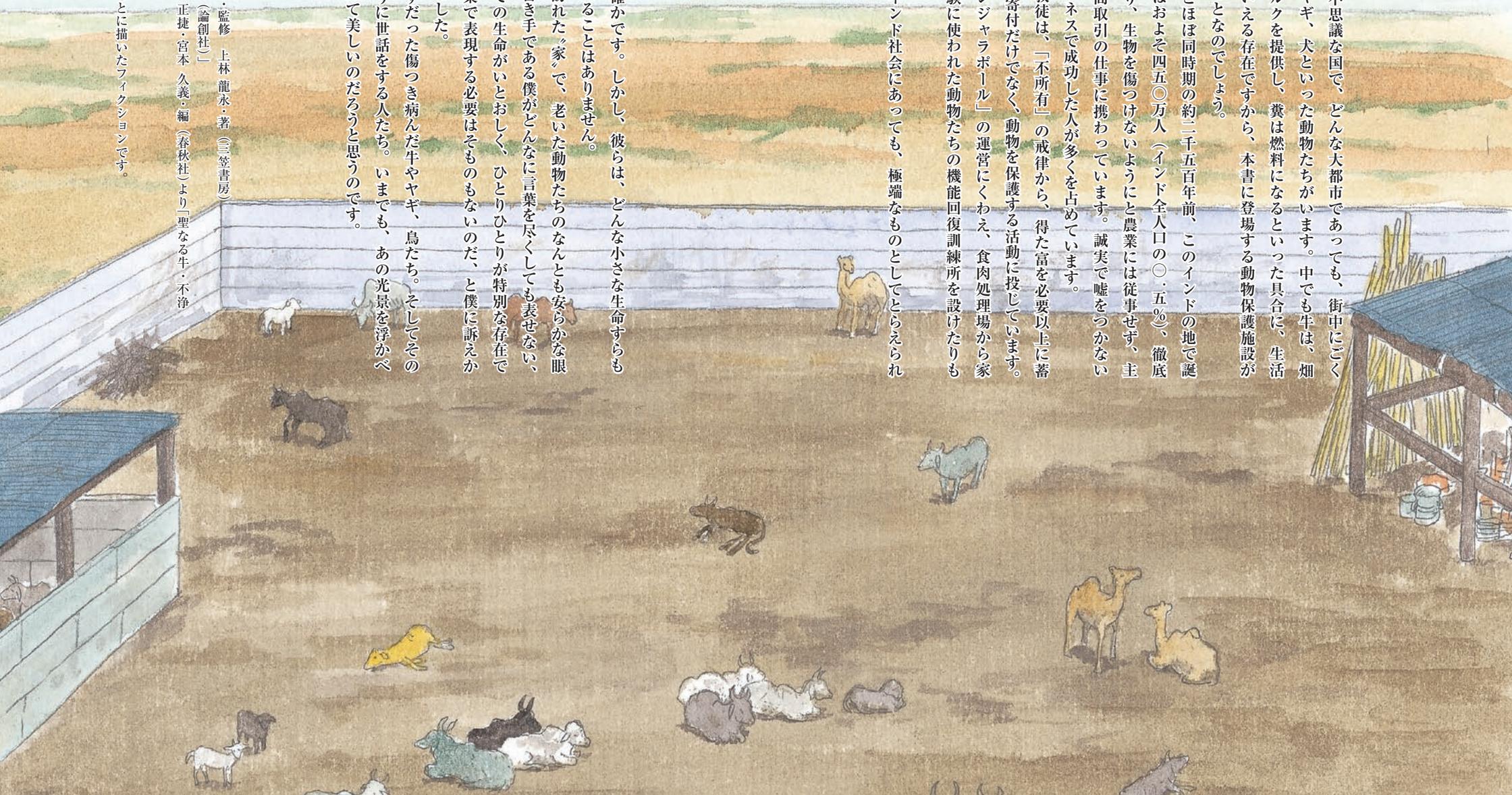
僕は、旅先でふいに訪れた「家」で、老いた動物たちのなんとも安らかな眼を見ました。それは、書き手である僕がどんなに言葉を尽くしても表せない、生命の光でした。すべての生命がいとおしく、ひとりひとりが特別な存在であること……これを言葉で表現する必要はそもものもないのだ、と僕に訴えかけてくるようでもありました。

路上で行き倒れるはずだった傷つき病んだ牛やヤギ、鳥たち。そしてその動物を自分の家族のように世話をする人たち。いまでも、あの光景を浮かべるとき、この世界はなんて美しいのだろうと思うのです。

## 参考文献

- 「ジャイナの教え」渡辺研二・監修 上林龍水・著（笠書房）  
「ジャイナ教」渡辺研二・著（論創社）  
「インド・道の文化誌」小西 正捷・宮本 久義・編（春秋社）より「聖なる牛・不浄なる水牛」（篠田 隆）

※本作品は、著者の体験をもとに描いたフィクションです。



【著者／中村しげき 略歴】

1974年富山県生まれ。京都精華大学を中退後、ライターとなり、雑誌等にアジアの旅行記を発表。『エレナ、目を閉じるとき』（ホノカ社刊）で第8回舟橋聖一顕彰青年文学賞最優秀賞受賞。著書に『世界でいちばん美しい景色のはなし』（ホノカ社）がある。

URL 「フリーダムワーカー」 <http://watashi.ne.jp/>

「世界でいちばん美しい景色のはなし」 <http://u-keshiki.net/>

【挿画者／いとう良一 略歴】

1961年東京都生まれ。幼少期は漫画家を夢見る。法政大学工学部建築学科卒（都市計画ゼミ）。オンラインシステム開発（ソフトウェア）のSEや印刷製版職人を経て、その後絵の方面へ進む。現在はフリーで、絵画、イラスト、デザイン、木工などを手がける。著書『やっぱりペンギンは飛んでいる！！』（技術評論社）。毎年数回の展示会を開催。日本で唯一のペンギンを専門総合的に解説するサイトも運営。

URL 「いちびりTOWN」 <http://www.1b-town.com/>

「ペンギンの達人」 <http://www.pen-t.com/>

## パンジャラポール

著者 中村しげき

挿画 いとう良一

発行者 中村茂樹

発行所 ホノカ社 <http://honokabooks.com/>

〒571-0039 大阪府門真市速見町5-5-305

電話 06-6900-7274 FAX 06-6900-0374

E-mail [info@honokasha.jp](mailto:info@honokasha.jp)

© 2009 Shigeki Nakamura, ryoichi Ito,

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で定められた場合を除き、著作権の侵害となります。